

ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言語哲学

——言語の起源と本質——

梶 嘉一郎

一八〇〇年十二月六日、フンボルトはゲーテ宛の書簡の中でつぎのように言っている。「私はずっと以前から国民性と言語の相違、ならびに言語が国民性に与える影響についての論文を考えていました⁽¹⁾」と。彼の言語に対する深い関心と理解は、一七九九年と一八〇一年の二度にわたるスペイン旅行によって、ますます深まってきたようである。彼はいまや、人間の個性をよりよく理解するための一般的なるものを、言語の中に見出し得ると確信したのである。これは、すでに彼が以前から持ち続けていた人間性へのあくなき探究心が彼をして、言語が人間存在にとって不可欠な要素であり、人間は言語なしには存在し得ないという認識へと導いていたことによるのであった。これよりさき、一七九四年フンボルトはエルフルトからイエナへと移住し、その地にいたシラーや、九六年末にヴァイマルからきたゲーテなどと親しく交ったが、この事が本来的な意味において、はじめて彼を言語哲学的な論争の渦中に投げ入れたと言えるのである。というのはこの年、彼は『考えることと語ることについて』*Über Denken und Sprechen*という手記を著わし、これによって彼としてはじめて、言語の本質的な規定を旨ざす体系的な立場を主張したからである。彼がなぜにこの時期にこのような手記を世に出したかは、かんたんには推測できないが、

ラーマース W. Lammerms も仮定するように、⁽²⁾ 彼がフィヒテの論文である『言語能力と言語の起源について』*Von der Sprachfähigkeit und Ursprung der Sprache, 1795* によって示唆された結果、彼自身の言語に対する思索を体系的に整理し、それでもってフィヒテの見解に対置させようとしたことは、あり得べきことであろう。

われわれはここでまづフィヒテの言語に対する見解を明らかにしよう。フィヒテにとって言語とは、端的に言って、自己の思想を任意に示すことの出来る能力である。したがってたとえば、自己の思いのままにならぬ感情を言語に表明するということは、それ自身内的な矛盾を含むものであり、それは正当な意味で言語とは見なされないのである。そうしてこのような能力を必要とする理由は、すべて何事によらずわれわれが他者を理解し、また自己を他者に理解させねばならないという必然性にもとづくのであり、またそれに尽きるのである。⁽³⁾ したがって彼は言語について、その持つ伝達機能を逸脱するようなあらゆる見解には、少なくとも彼の『ドイツ国民に告ぐ』*Reden an die deutsche Nation* の講演の時期までは、きっぱりと拒絶したのであった。彼は言う「人びとが言語なしには、そもそもいかなる理性の使用も生れなかつたなどと言うのは、私の見解によれば、あまりに言語を重視しているからである」と。⁽⁴⁾

右のようなフィヒテの見解に対してフンボルトのそれは、如何なるものであろうか。彼の初期における言語哲学的な洞察と見解が、どの程度にまで達していたかは、前掲の彼の手記の中に明瞭に示されている。⁽⁵⁾ いまその主要点を要約してみると、

- (一) 考えることの本質は、反省すること (*Reflektieren*) の中に、したがってたんに記憶すること (*Gedachten*) と区別することの中にある。
- (二) 反省せんがために精神はその前進的な活動を一時中断する。これによって精神は表象 (*Vorstellung*) を作り、

さらにそれらを一つに統一し、自己に対する対象そのものとする。

(三) ここに考える主体 (Subjekt) に対して一つの客体 (Objekt) が対置されるが、これはわれわれの感覚の一般的形式の助けなしには起り得ない。かくしてそこに感覚的名称としての広義の言語 (Sprache) が生じる。

(四) したがって言語は直接に、反省という最初の行動と共にはじまるのである。

というのである。こうした要約からつぎに帰結されることは、彼が人間の反省作用によって生じる思惟の本質を検討することによって、そこから言語に対する規定を引き出したということである。もとより彼の右のような思惟の規定は他のそれに比して厳密ではない。しかし人間は思惟すると同時に言語を生み出す存在であり、したがって思惟的存在であると共に言語的存在であることを暗示したのは、ファイヒテが言語を意志疎通の為の手段として、いわば人間にとって第二義的なものであるとしたことに対して、まったく対照的である。

しかしながらフンボルトもまた、ファイヒテと同様に、一方で言語の持つ意志疎通の手段としての機能をけっして無視しなかった。彼は言う「語られたすべての言葉は、自己を他者に了解してもらおうとする試みであった。孤島に置かれた人間はけっして語るべき着想にも到らなかつたであろう。なぜなら、言語の持つ性向は、はなれがたく社交性の持つ性向とかかわりあっているからである⁽⁶⁾」と。言語はこのように他者との結合を成就し、人間の社交性を維持していくものではあるが、しかしこれと共にフンボルトにとって言語は、その伝達の面で一つの限界を持つものであった。それは彼がつねに強調した了解の限界にかかわるものである。すなわち了解とは「いつもただ語る両者の共通の結果であり、したがって個人の持つ個性という鋭い刻印は、つねに自己から遠ざかってしまうのであり、各人は、つねに誤解されるかも知れないという可能性の前提と共に語るのである⁽⁷⁾」。ある者の語る言語が共通的なニュアンスを持つ表現をもってしても、究極的には語られる者にとって了解出来得ないという言語の持つこの

一般的な欠陥は、たとえば、異った言語性格を持つ外国語の場合には、ことにはつきりと認められることである。というのは、ある対象に対する異った言語による異った名称は、任意に交換しがたく、その各々の名称は対象に対して、別の意図を包含することがしばしばあるからである。しかしまた逆に、この相互了解の徹底的な不可能性と、一方で言語の持つそのような多義性のゆえにこそ、われわれは他者の、また世界の豊かさを認め得るのであり、そこにこそより深く広い人間理解や世界理解に到る道も開けているのである。

フンボルトのローマ滞在の前の年、一八〇一年から一八〇二年にかけて断片的に出版せられた彼の『バスク民族についての各論』 *Fragmente der Monographie über die Basken* でもって、フンボルト言語哲学への出発点は確立した。もちろんそれ以後、彼は自己の言語哲学完成の為に、なお二十有余年を費消するのであるが、ともかくもそれまでに明らかになったつぎに述べるような言語に対する彼の見解は、その後における彼のこの方面での思索を決定的に方向付けるものであった。

- (一) 人間は言語によってのみ人間である。
- (二) 言語と人間の社交性とは、ともに人間に共属している。かくして人間は本質的に言語を話すものであり、したがってまた社会的動物 (*animal sociale*) である。
- (三) 言語は自我と世界の間を媒介する。
- (四) 言語において人間は、人間形成の可能性を所有する。
- (五) 言語は人間育成の機関 (*Organ*) として、精神のたえざる緊張であり、活動 (*Energieia*) である。

註

(1) Goethes Briefwechsel mit Wilhelm und Alexander von Humboldt. Hrsg. v. L. Geiger. Berlin 1909. S. 104.

- (2) Lammers, Wilhelm: W. v. Humboldts Weg zur Sprachforschung. Rostock 1936. S. 52
- (3) S. in J. G. Fichte's sämtliche Werke. Hrsg. v. J. H. Fichte. Leipzig o. J. Bd. 8, S. 301—341
- (4) Fichte a. a. O. S. 309
- (5) W. v. Humboldt: Gesammelte Schriften (Hrsg. v. d. Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften.) Bd. VII 2, S. 581—583.
- (6) ebd. S. 596.
- (7) ebd. S. 597.

二

われわれは右に概観したフンボルトの言語観をさらに詳細に考察するために、まづ十八世紀を中心に開花した言語の起源についてのいくつかの主張について触れることとする。第十八世紀における言語起源についての論争は、言語の本質についての討論とかかわり合うものであった。言語の本質について何かを把握せんがためには、言語がいかにして発生したかを究めねばならないのであり、この事は、この時代の言語研究にたゞさわる者のすべてにとっての共通の確信であった。ところで言語起源論の第一は、北方ドイツの思想家、ハーマン J, G, Harmann らの唱えたいわゆる言語が究極的には神によって授けられたとする言語神授説である。彼によれば、言語もまたこの意味で神的 || 理性的なるものであり、したがってたとえば、理性的なるものを考究する哲学は、言語の解釈でもあった。しかしこのような見解に立てば、言語への探究的な意図は究極的には消滅し、同時に言語は神秘的世界へとその影をひそめてしまうであろう。そこでつぎにこのような見解に反対した者は、後述するように、フンボルトの言語観

に深い影響を与えたところのヘルダーであった。

しかしここでわれわれはヘルダー以前に、フランス啓蒙期におけるコンディヤク E.B. de Condillac やルソー J.J. Rousseau について言及せねばならない。この二人はともに言語起源論において、ハーマンやヘルダーとは対照的な立場に立っているからである。周知のように一七四六年、コンディヤクは『人間認識の起源に関する試論』 *Essai sur l'origine des connaissances humaines* において、言語はそれを使用し規則化するところの人間に生来的な感覚の叫びから発生するものとなし、したがってその起源は神的でもなければ（ルソーの言う意味で人間的でもなく）、むしろ動物的なるものであるとみなしている。⁽¹⁾ つぎにコンディヤクのこのような見解に対し、ルソーは、彼が一七五三年、ディジョンのアカデミーに提出し当選はしなかったが、後にすぐれた政治的社会的批判の書であるとみられた彼の『人びとの間における不平等の起源と根底についての論（人間不平等起源論） *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes* において、コンディヤクの右のような見解に挑戦している。⁽²⁾ ルソーは、動物も人間も自然の状態においては言語を持合せていないのであり、たゞ時の経過によって人間は他者と交り、そこから言語が相互理解の手段として発展したというのである。

右の二人の言語発生に対する見解には大きな相違は見られない。たゞコンディヤクが人間に生来的な感覚や、あるいは社交性を持出し、それらが言語成立の可能条件であるとするのに対し、ルソーはなお一そう原始的な原人を考え、そこでは言語は発生しないが、そうした個人よりもむしろ、そこに漸次形成される社会によって、言語が生れると考えたのである。いづれにしてもこれら両者の言語起源に対する見解に共通的なものは、現在する人間の分析から、人間を社会へ組入れることによって、そこから言語の発生を説明しようとしたことである。換言すれば、人間の孤立の状態から出発して、つぎに協同的人間の領域を開示し、そこに人間を組入れる機能としての言語

を見出したのである。フンベルトは、一見相対立するように見えながら、しかも共通的な地盤から生ずるこのような両者の見解を、すでに若き頃に知っていたようである。というのは、ドイツ啓蒙思想家の一人、メンデルスゾーンが、一七五六年、ルソーの『人間不平等起源論』を翻訳し、当時ライプツヒに居住していたレッツィングへ、送り状と共にその翻訳を送付しているが、その中で右のコンデイヤクとルソーの見解の相異を述べている⁽³⁾。フンベルトは彼の最初のベルリン時代（一七八六年頃まで）にこのメンデルスゾーンをめぐる啓蒙的なサークルと多様に結ばれていたし、またメンデルスゾーンの影響も多分に受けているといった事情があったからである。しかしフンベルトは、両者のこのような見解に対しては、なお、彼のパリ滞在期にもじゅう分研究の機会があったにもかかわらず、それ程の注意は傾けなかったようである。いったい、その理由はどこにあるのであろうか。

もともとコンデイヤクやルソーの言語起源論は、フンベルトにとって全面的に肯定され得るようなものではなかった。彼等の言語観はいわば、言語に帰属しないある先入観的なものからの言語規定であり、言語と人間との間には、つねにある程度の隔絶がみられるのであった。これに比してフンベルトの言語理解においては、先の概観からも推測されるように言語と人間との関係は、つねに相即的である。これは彼がすでに言語の起源およびその本質について、なみなみならぬ深い洞察を持っていたことによるのである。彼によれば、人間はつねに部分の添加によってますます完全となるような機械ではなく、すでにその当初から各部分の総体として存在するものである。したがってすでにあらゆる部分が人間の全体を前提し、このような全体によってのみ部分は存在するのである。一つの全体的な有機体そのものである。そこであらゆる有機体に妥当するごとく人間もまた、その全体を貫流するただ一つの力によって成立するのであり、人間の言語もまたその例外ではないのである。このことから人間と言語についてつぎのように言い得るであろう。人間は言語によって人間であり得る。しかし言語を見出さんがためには、人間

はすでに人間であらねばならぬ⁽⁵⁾。しかしこのような見解は、もちろん彼一人が打ち建てたものではない。すでに彼をしてこうした識見に到らしめたその根底には、先に触れたヘルダーの言語理解があったのである。われわれはつぎにヘルダーを一べつしなければならぬ。

フンボルトの言語に関するもつとも初期の見解は、ヘルダーの言語的著作によって啓発されていた彼の師エンゲル Engel の影響によるものである。したがってこの点で彼はたとえ間接的とは言えずに最初から、ヘルダーとは深いかわりがあったのである。ヘルダーは一七七二年『言語起源論』 *Abhandlung über den Ursprung der Sprache* を世に出したが、これは前述のハーマンの神的な言語起源論に対して、またコンディヤクヤルソアの自然的発生論に対して、いわば人間中心論とも言い得るような立場を表明するものである。ヘルダーにとって言語成立の為の決定的な前提は、まづ聴くこと (Hören) である。⁽⁶⁾ たとえば人間が小羊の鳴き声を聴く。彼はつぎにこの鳴き声という徴表に注目し、深い印象を受け、それをさらに再認識する。この時その鳴き声は、人間に羊であることを想い起させるような標語 (Merkwort) にまでなり、そこに言語が生じるというのである。⁽⁷⁾ すなわち、人間の内的感覚は、直接的な仕方である感情を出現させるような動物的な表現を、右のような操作でもって一つの記号にまで変化させるのであり、つぎにこの記号が音声と結合し、かくして一定の意味を含むところのある言葉が成立するのである。このような経過をたどることによって、人間は他の動物と区別せられる。なぜなら、人間は右に述べたような場合には、感覚の混とんによって圧倒されることなく、与えられた記号を選択し、つぎに感覚と記号を一致させ、これに名称を付与し、もって現象と表象の多様性を整理し得るからである。そうして人間にこのような働きが可能なのは、ひとえに彼が他の動物と異って反省の機能を有するからである。ヘルダーは言う「人間は、人間にのみ備わるところの顧慮や反省の状態におかれている。そうしてこの反省が、まづもって自由に働いて言語を見出すので

ある」と(8)

ヘルダーの心理分析的で人間中心のこのような言語観が、フンボルトの言語理解に強固な基礎を与えたことは明白である。たとえば、すでに述べたように、フンボルトにおいても言語に対する考察に際して、反省の概念は決定的な出発点となっていたのである。また言語が他者との相互交渉や、あるいは、あらかじめ指定された他の任意の想定から生れるのではなく、むしろ個性的な人間存在そのものの中に、その萌芽を有するものであるといったことは、彼がヘルダーから学んだところの言語起源論における決定的な前提であった。しかしつぎに、言語起源への問いにおいてまさにフンボルトの言語哲学的な考察が、ヘルダーのそれから別れるところの本質的な区別が、一八〇〇年以降徐々にあらわれてくるのである。

すでに述べたように、ヘルダーは彼の起源論において、人間は反省によってはじめて言語を創造しなければならぬし、ある程度このような反省の結果として言語が生じるということは主張したが、しかし逆に、人間が彼自身の言語によってはじめて、自己を意識し得るということは、ただの一度も強調しなかつたのである。換言すれば、ヘルダーは言語が人間に依存するということは示し得ても、逆に同じような方法で、人間が言語に依存すること、すなわち、言語が人間に及ぼすところの力は、究極的に把握し得なかつたのである。ここにわれわれは、たとえヘルダーの言語観がフンボルトの言語哲学の中に数多く再現されているとしても、当時の人間学的に整備された方向のみを、言語哲学に導入しようとしたヘルダーの業績と、フンボルトのそれとの間に、根本的な相違のあることを認めるのである。われわれはヘルダーの言語起源論におけるその卓見を十分に認めつつも、それが言語に対する人間存在の意義解明にとどまったことを惜しむものである。正統の言語哲学が目ざすところは、言語に対する人間存在の意義とともに、人間存在に対する言語の意義如何である。そうして、このような言語と人間との相互より生ず

関係は、次に考察しようとするフンボルトに到ってはじめて、その鋭利な洞察から解明されようとするのである。すでに(一)の後尾において予備的に述べた言語観にもとづいて、フンボルトの考察は、直ちに言語そのものに向うのである。彼にとって言語は「人間本性の深みから生じる」⁽⁹⁾ものであり、しかも「人間によって見出され得ないものである」⁽¹⁰⁾。別の個所で彼はつぎのようにも言う「言語は、その源泉を、人がむなしくも現象の領域に求めるところの、内的な自由から生れるものであり」⁽¹¹⁾「思うにまかせぬ精神の流出である」⁽¹²⁾と。同じようなニュアンスを持ったこのような表現は、察するに結局、言語起源の不明瞭で説明のつけ難さを言外にあらわしたものであろう。すでに述べたように、コンデイヤク・ルソーあるいはヘルダー自身でさえも、言語起源の秘密を一面的に論理的方法で解き明そうと試みたが、すでにこの時、初期ロマン主義者たち、なかんづくシュレーゲル兄弟やノヴァーリスは、言語の根源は人間悟性の手段をもってしては、把握不可能なことを見透していたのであった。フンボルトもまた同様であった。そこで彼にしたがえば、⁽¹³⁾こうも言い得るであろう。「言語は見出されるものでなければ―ちようど彼が「発見」について時折語ったように―また作られるものでもなく、人間の内なる自然から発するものである」と。それでは言語起源の問題はこのようにして結局、人間悟性によっては究められない域にあるのであろうか。われわれは、もはやこの問題については、エポケ(epoké)のみを主張すべきであろうか。

しかし、さらにフンボルトの作品の中には、右のような言語起源に関する問題の決定的な解決には役立たないが、この方面でわれわれの考察を深める上に大きな示唆を与えるような見解が見られるのである。一八二二年からの『バスク語と民族についての報告』Ankündigung einer Schrift über die vaskische Sprache und Nationの中で、彼は人間の個性と理解に関して、大略つぎのような確信を述べている。人間はそれ自身、はっきり他者と区別されるような個性を持つものではなく、我と汝(Ich und Du)もまた、その分岐の点まで帰り行く時は、むしろ同一の概念で

ある。この意味において個性の範囲は、その分岐点に到るまでの距離なのである。この事はまた、たんに個人の場合にかぎらず、多数の原始的な種族にいたるまでも同じであり、さもなくばあらゆる理解は、永遠に不可能となるであろう、と。要するに彼にとっては、個性は究極的には、その個性を基礎づけるところの全体的な統一性から生じるのであり、個性は、それを支えるこの統一性が、時空という制約のもとで現象するところのいちいちの様式にすぎないのである。このようにして彼は、個性よりさらに上位の統一原理を要請するのであり、これによって我と汝、我と世界との根元的一致や理解の可能性を基礎づけるのである。

こうした見解の妥当性を証明するために、彼は言語を引証したのである。というのは、個人の言葉が、民族の言葉と、いや広く一般の言葉と結びつくのは、そこに人間の自然的本性が持つところの右に言った意味での統一性が存在するからである。それゆえ、彼はまたつぎのように語るのである。「本来、自己と同一であるところのものから生じるものは、その点で主観と客観の概念を、依存性と独立性との概念を相互に超越するものである」と。かくして言語は、我と汝が不可分の関係にあるような連帯性の中における個別性から生じ、また世界の多様な現象を基礎づけるような根元力の不可分性と統一性の中において生じるといい得るであろう。このようにして言語の起源は、すでに洞察されるように彼にとっては、ヘルダーの意味におけるように純粹に悟性的な人間中心的な性格を持つものではない。それは必然的に、人間の個性相互の中に上位づけられた無限の統一性―言語と人間にとって同じ仕方で構成的であるような統一性―に触れ、そこへと引きさがってしまっているのである。

こうして人間の個性を究極的には右の統一性へとおしもどし、それでもって個性の徹底的解明の試みを放棄したかにみえる彼の思索は、言語の起源に関しても同様の手続をとったのである。というよりはそうせざるを得なかったのである。したがってそうした意味で、言語の起源は同時に人間の起源である。言語はわれわれにとって国民や

民族の創造物ではなく、むしろそれは人間に与えられた賜り物である。しかしながら一方で彼が「言語は社交性の展開の為に必要欠くべからざる補助手段である」⁽¹⁶⁾と云うとき、語ることはその民族や国民と共に発展しなければならぬし、それによって国民や民族の精神は、ますますその独自性を獲得し、そこからしてまた逆に、国民や民族の言語が紡ぎ出されねばならないであろう。それゆえ彼は一見矛盾的是であるが、つぎのように語ったのである。「言語がその自発性において、ただひとりでに生じ、まったく自由であるとみられることと、一方で束縛されたるもの、また人びとが所属する国家に依存するものとみられることとは、けっして空虚な言葉の遊戯ではない」⁽¹⁷⁾と。

われわれはここで言語一般の起源と言語の起源とを、また言語の発生とその再発生とを、区別することが必要であるように思われる。言語一般とは、その自由な自発性において、あらゆる現象を自己の中に止揚し、それらを基礎づけるところの統一性から生じるものであり、この意味でそうした言語は民族の作品でもなければ個人の作品でもなく、むしろそれらの根底にあってそれらの成立を可能にするものと解せられる。これに対して言語がフンボルトにとって、国家に依存した民族精神の表現であると言われるとき、⁽¹⁸⁾それはすでにそしてつねに、一定の現象する言語であり、必然的に言葉を語りそれによって発展する人間と結ばれるものと解せられる。言語はつねにこのような統一性と現象という二重構造を所有するものであり、そうした観点に立つてはじめて、右にあげたフンボルトの言葉が明瞭に理解されるのである。かくして言語起源への問いを言語の持つそうした二重構造に即して考察するとき、また二つの側面に分れることとなる。一方で言語は超人間的であるところの根拠から生じ、他方ではしかし、人間自身のその都度の言語活動を制約するところの、与えられてある言語という地平の中に生じる。そうした意味で言語の起源は人間的であると同時に非人間的であるといひ得るであろう。言語が具体的なこの人間や民族におい

てはじめて現実的となり、同時にその民族や人間を基礎づけ形成していく限りそれは人間的である。しかし一方でフンボルトが言語の究極の根拠を、あらゆる個人の存在を形成し人間の認識を拒絶するような統一性の領域におしもどす限り、それは非人間的である。

ヘルダーやその他の人びとの言語起源に関する見解も、究極的にフンボルトにとって決定的な意味は与えなかった。それは彼が彼等とはむしろ逆に、人間の精神的発展に対する言語の意義を問うことに、その主題を設定したからである。どのようにして言語が一定の民族や個人において発生し、また言語と民族性、言語と精神がどのようにかかわり合っているかということから出発して、彼は、彼の人間学を、また経験的に方向づけられた言語学を、そしてそれらを統合するところの言語哲学を集中させるところの根拠へと進んでいったのである。その間そこに終始するものは、どこまでも純粹に思辨的で一面的な問題解決を避け、確定的な表明をなさないかわりに、断片的に継続して働く指示でもって満足するという彼の一般的傾向であった。したがって彼の言語哲学探究においてあらわれてくる根本概念もまた、多分に不確定で一種の暗さを持っている。当然のことながら彼の言語起源に関する見解の中にも、究極的にはなんら明確な結論といったものは見出されない。しかしこの事はもはや、一人の人間によっては克服しがたい言語の深さや広さを示すものであろう。フンボルトは若い頃、自分は学問の探究に際して、その生涯に背負いきれないほどの構想に身をまかせ傾向があると嘆いたが、彼のこの傾向はまた、言語およびそれを語る人間についての彼の探究に際しても、じゅう分に見出されるところである。しかしながら、言語起源論において、先に述べた統一性の奥に隠れるかにみえた彼の言語論は、その後の彼の思索の中心となる言語の本質を基礎づける根拠として、いつまでも生きつづけるのである。

註

- (1) S. den „Essai“ in den „Oeuvres philosophiques de Condillac“. Hrsg. v. G. le Roy. Bd 1. Paris 1947, S. 1–118.
- (2) S. in Oeuvres complètes de J. J. Rousseau. Tome 1. Paris 1825, S. 217–328.
- (3) S. den Abdruck des „Sendschreiben“ in Moses Mendelssohn: Gesammelte Schriften. Jubiläumsausgabe Bd. 2. Berlin 1931. S. 81–109.
- (4) W. v. Humboldt: Gesammelte Schriften. Bd. IV, S. 3
- (5) IV, S. 15
- (6) Über die Stellung des Hörens bei dem Vorgang der Spracherfindung in Herders Ursprungsschrift s. J. G. Herder's sprachphilosophische Werke. Ausgewählte Schriften. Hrsg. v. E. Heintel. Hamburg 1960, S. 32 Vgl. vor allem S. 41.
- (7) a.a. O. S. 24
- (8) ebd. Zur Bestimmung des Begriffes Besonnenheit und Reflexion s. auch S. 22 und 24 ebd.
- (9) W. v. Humboldt: Gesammelte Schriften. Bd. VII 1, S. 59.
- (10) Derselbe, Bd. IV, S. 249
- (11) Derselbe, Bd. VII 1, S. 176.
- (12) Derselbe, Bd. VII 1, S. 46, Anmerkung 1.
- (13) Vgl. z. B. Bd. IV, S. 15.
- (14) Bd. III, S. 297.
- (15) Bd. VII 1, S. 63. auch Bd. IV, S. 3, S. 14 ff.
- (16) Bd. VI 1, S. 23.
- (17) Bd. VII 1, S. 17.
- (18) Bd. VII 1, S. 42.

フンボルトは人間の個性を比較的方法によって理解しようと試みたが、言語研究においても同じような方法をとった。彼は各国の言語を比較研究することによって、言語一般の本質的構造を説明しようと試みたのである。しかしその際、すでに彼が人間存在の規定の際に、純粹に論理的な手続では克服出来なかつた一つの限界に突き当たつたように、ここでもまた、悟性では処理し得ないような究極的なもの前に立つたのである。そこで彼は直観的な観察によつて言語の本質に近づこうとしたが結局、彼の言語研究の終局においても、決定的に妥当するような定義は見出せなかつたのである。言語の本質に対する彼の思索には、いつもあたらしい問題がつきつきと生じ、予感としては明らかな言語の本質を論理的に説明しようとしても、それはつねに究極的な形式化からは遠ざかつていくのであつた。彼は言う。「このようにして、言語の眞の本質へは、いかなる、たとえ全く完全な分析によつても到達され得ないのである。それは全体をつつむいぶ気から滑り出る。ちやうど山の霧が遠くではその形を示しているが、それに近づくとも形がなくなつてあたりを散つてしまふように、細かい要素は観る者の眼からなくなつてしまふのである⁽¹⁾。あるいはただ予感的な認識だけが言語の本質の痕跡を開示するのである⁽²⁾。

言語は人間の精神と比較される。人間の精神がその独自性のゆえに部分的な尺度や記述によつては、一つの全体にまとめられず、つねにその都度、人びとに別のものとして現われるように、言語もまた、記述される総計より以上のものを包含するものである。したがつてここで言語の本質へのあらゆる展望を叙述することは、可能でもなければまた必要でもない。ここでは言語の本質的構造に関してフンボルトがつねに強調した二つの構成要素をとりあげることにとどめたい。それは内的な言語感能 (*die innere Sprachsinn*) と音韻形象 (*die Lautform*) とであり、この

二つの要素によって真の言語は成立するのである。その際、前者については、端的に言って言語をエネルギーア (Energiea) と見なすことによって必然的に派生する問題にも言及し、後者については、思想を形成する器官としての言語の解釈から生じる、言語の対象構成的な機能が明らかになされるであろう。

フンボルトのみならず、ヘルダーの場合にも言語解釈の面で、コペルニクスの転回を意味するような言語の本質的规定はいうまでもなく、言語がエネルギーア的性格を所有するという見解である。「言語は、死んだ所産物ではなくて、産出活動と見なされねばならぬ」⁽³⁾ ということである。その「実際的な本質において理解される言語は、たとえばつねにそうして、あらゆる瞬間に、過ぎ去りつつあるものであり、それ自身けっして完結した成果 (Werk) (Ergon) ではなくて、むしろ一つの活動 (Thätigkeit) (Energiea) である」⁽⁴⁾ したがって彼によれば、言語の本質はただその現実的な産出活動の中にあるのであり、それは分節された音声を思想の表現にまで構成するところの、永遠にくり返えされる精神の活動である。彼は言う「言語はつねに表現のあたらしい産出である」⁽⁵⁾ またこうも言う「ちようど人間そのもののように、時間において漸次発展する無限的なるものである」⁽⁶⁾ と。ここでわれわれが留意しなければならぬことは、産出ということばについてである。右のような思想の表現を産出する精神活動 || 言語は、ただたんに外部からの刺激によって、なにかの資料を産み出すといった受動的に生産的なものではない。その産出活動はつねに自立的であり、したがって変動的であり、同時に全体的である。言語の産出とはまさにこのような意味においてあるのであり、またそうした意味で言語はたんに語られたることの、総計であるばかりでなく、また語られる可能性の総体である。カッシーラー E. Cassirer も言うように「言語の本質は、個別化の性格を持つ抽象の中にあるのでなく、このような個別化の全体性の中にあるのである」⁽⁷⁾

エネルギーア的性格を所有するとみられる言語観は、ほぼ略述された。しかしフンボルトはこうした言語観のみ

に固執したのではない。彼の持つ全体的で深い洞察は、つぎに述べようとする、言語の持つエルゴンの性格をも見逃さなかったのである。彼は言う「言語には、言葉という貯え (Vorrath) と、規則的な体系が帰属する」と。エネルギーとしての言語は、もちろんたんに流れゆく空想的な精神活動であってはならず、語られようとする資料は再生産的にまとめ上げられねばならない。それがために言語を生み出す作用そのものとは無関係に、エルゴンとしての客観的な言語形式 (Sprachform) や音韻形象、文法 (System von Regeln) などが存在するのであり、これらもまた、言語に所属しないとは言えないのである。そうしてこれらに依存することによって語られようとする資料は、はじめて具体的に生き生きとした言語になるのである。そうした意味では、言語は言語生産的な活動において主観から発するのではなく、何かすでに意味を所有するものとして、その都度の言語活動の前にそれ自身で存在する客観から発するものであるとも言い得るであろう。フンボルトは、こうした言語の持つ独自の性格についてつぎのように語るのである。「言語は、いつもただその都度の思索においてのみ、その妥当性が認められる。しかし言語全体は、その都度のこのような思索には依存しないものである⁽⁹⁾」と。

語ることは、無からの創造 *creatio ex nihilo* を言うのではなく、人間の中にある何かある潜勢的な可能性からの現実化と自己化を意味するのである。この潜勢的な可能性こそは、人間が人間であろうと欲するために発する言語である。そのとき人間がエネルギーとして生み出すところの言語は、一方ですでに作られた素材として、エルゴンとして、人間の前に存在する。かくして人間の中にあるエネルギーは、言語活動において語ろうとするものを、その個性的な仕方に応じて明らかにしようとする。しかしそれがためには、あらかじめ現前するものにそれを結合して、いわば再生産しなければならぬ。ここに語ろうとするものの全体性としてのエネルギーと、言語的な客観形象としてのエルゴンは結合し、言語を構成する二大要素となるのである。しかしこれらはけっして言語の異つ

た二つの側面ではなく、むしろそれらは直接的なつながりにおいて相互依存的である。一方は他方に依ってはじめてそれなのである。したがって言語はエネルギーであるかぎり、エルゴンであり、エルゴンであるかぎり、エネルギーである。あるいはフンボルトにしたがってこうも言えるであろう。「言語は、それが主観的であり依存的であるかぎり、客観的であり独立的である」⁽¹⁰⁾と。

言語をエネルギーおよびエルゴンとみるこのような解釈は、言語を純粋にエネルギーにのみ限定する見解に對して、どのような意義を持つのであろうか。ここでは二つの点をかんとんに述べておこう。その一つは、言語を純粋な精神の自己活動と考へ、言語がただ言語生産的な活動の中にのみあると考へるならば、そこにはただ個人の総合的な精神力の表現としての個性的言語のみがあり得るだけである。かくてはいかなる言語も他の言語と一致することは不可能であり、したがって言語一般の成立もまた不可能となるわけである。つぎの点は、言語がたんにエネルギーだけでなく、またエルゴンでもあるという規定に立ってはじめて、フンボルトのいう個性と言語社会（民族や国家）との結合も可能となることである。彼は「個人の主観性は、国民の、あるいはそれに先行し同時に存在する種族の、さらに究極的には人間一般の言語によって破られ、やわらげられ、拡張せられるのである」⁽¹¹⁾と考へていた。なるほど言語は個人に所屬してはいる。しかしその言語は、けっして完全にあたらしく作られ、誰によつても理解され得ないような言語ではなくて、すでに個人に先行する国民の言語であり、そこに個人が存在するところの民族の言語なのである。したがってまたつぎのようにも言い得るのである。「言語は、私がそれを使うから私ののである。しかしその事が可能なのは、あらゆる人びとが言葉を語り会話をなし得るといふことにあるからして、私はまた言語について規制を受けるのである。しかしそうした規制は言語の中に、したがってまた人間である私の中の総括的な本性からも生ずるのである」⁽¹²⁾と。

いままでに略述してきたような言語の本質的規定から、言語は思想を形成する器官であるという、フンボルトの確信⁽¹³⁾が生じるのである。それは、言語の働きは音節化された音を思想の表現にまでもたらしことのできる精神の働きであるということである。われわれはつぎに彼の所説にしたがって、思想と言語の関連を考察してみよう。彼にとって言語の決定的な活動は、思考を可能にする点にある。と同時にまた思考の必要が言語を覚醒させる点にもある。そうした意味で思考と言語は相互依存的である。しかしこれら両者に共通する根拠、これら両者を支える第三のものはなんであるのだろうか。これについては、さきに彼が言語の起源そのものを明確になし得なかったと同様に、最後まで明瞭にはなし得なかったようである。「思考と言語とは心情の到達しがたい深みからあらわれてくる⁽¹⁴⁾」のである。ここでちょうどわれわれは、カントが感覚と悟性の両者の認識を可能にするような共通の第三の根拠を、物自体 (Ding an sich) として不可知であるとしたことを、想起するのであり、フンボルトにもカントのそうした思考法が影響していたことは、じゅう分に推測されるところである。

フンボルトに対するカントの影響は、フンボルトが思考と言語の関係を考察する場合にもみられるところである。すなわち彼は思考が言語の条件として、また逆に言語が思考の条件としてどのように連関するかを、つぎのように考察するのである。「人間の主観的な活動性は思考の中に、ある客観性をとどめるものである。なぜなら、いかなる表象の結合も、すでに存在する対象のたんなる感受的な観察としては、考えられないからである。感覚の活動性は自己を、精神の内的な行為と総合的に結合しなければならぬのであり、⁽¹⁵⁾ここにカントの言う構想力 (Einbildungskraft) が働く」かくしてこのような結合からして、表象が自己からはなれて、主観的な力に対して客観的なものとなるのである⁽¹⁵⁾。この場合、言語は不可欠なものである。言語によってはじめて、精神的な努力は唇を通じてその道を拓き、自己の産出したるものを、再びその耳にとりもどすことが出来るのである。こうして表象は、主観からまった

く絶縁することなく、現実的な客観の中へと移行し得るのであり、この事はただ言語のみがよくするところである。

ほぼ、フンボルトの所説にしたがって考察した右のような思考過程は、まったくカント的である。すなわち客観は、統覚 (Apperzeption) の働きによって純粹に模写 (Abbildung) されるのではなく、むしろ人間に個有な構想力によって、あらたなる対象として規定されるのである。要するに人間の認識は、ただちに対象に向うばかりでなく、認識によって対象に向うのである。このような過程を経て作られた表象は、しかしまた客観そのものとして主観に働きかけるのであり、その際にはかならず言語を必要とするのである。なぜなら言語はまた、そうした客観化のための可能性の条件として証明せられるからである。つまり言語によってはじめて、思索の可能性が現実性となるのである。なるほど思考は精神の本質的表現性として、たえず自己を産出するものであるが、その際、現実的にはただ言語だけが思考の思索を、すなわち思考を意識化することを言い得るのである。

こうしたことからしてフンボルトの言語理解は、必然的に、思考の模写としての功利主義的な言語理解から遠ざかるものであり、逆にそれは、言語が思考につけ加わるものでなく、思考と共に発生するという、直接的な言語そのものの規定から生じたものである。この事は具体的には、思考が知性的な活動と音声との結合によってはじめて、外界に出現するという事実によっても証明せられるであろう。言語は思考と共働して対象を構成する機能を有するのであり、フンボルトの意味におけるエネルギーとしての言語もまた、こうした意味において理解されるべきであろう。すなわち、言語は他の存在物のように一定の現存在ではなくて、むしろ思考とともに、そうした現存在一般を産み出し得るところの前提であるとするとき、はじめてフンボルトの言語規定は、その持つ独自の意義をあらわにすると思われるのである。

言語は思考と共に生れ、さらに思考の再生産にとっても必然的な意義を有するものであるからして、いかなる思

考も言語なしにはあり得ないのである。それは精神的に実在するものとしての人間にとって、その必須の存在条件として生れ、働くものである。したがって言語の出現は、人間性の内的な必然性によるものであり、たんに外的に、社会性の維持のためのものだけではない。それは人間性の本性そのものの中にあり、人間が自己の思考を、他者との共通の思考によって明確になし、それによってその精神的諸能力と世界観の獲得をはかるために必要不可欠なものである。しかし問題はなお残る。それではなぜに自己の思索でもって、他者に対するかわりが、すでにそして必然的に伴ってくるのか、換言すれば、何ゆえに人間はその思索を、他者との共通の思考において明確になし得るかということである。この場合フンボルトは、言語と共に働く思考そのものの中に生じる他者への顧慮を、第二次的なるものでなく、むしろ自我の自覚性の必然的な構成要素として措定するのである。⁽¹⁶⁾すでに言語によって自己自身に達するという働きの中に、他者は、はじめから同伴し共に措定されているということである。すでに思考も言語も本質的に、はじめから社会的な背景を持って生れるものであるからである。人間はその場合、自己の持つ身体的感性的な他者との関係を度外視しながら、しかも自己に対する汝を眺めているのである。この意味でフンボルトによれば、言語の根元的な本質の中にはつねに不変の二元論 (Dualismus) ⁽¹⁷⁾があり、したがって言語成立の可能性は、そうした意味では、つねに他者への語りかけと、その再現によって条件づけられるのである。

すでに人間学的な立場から、人間をとくに、語り思考する存在であるとみなし、そこからまた言語の本質解明にせまろうとしたフンボルトの叙述の中には、言語の本質についての論理的に明確な結論は見出せない。しかし右に述べてきたような考察からして、すでに言語一般について彼が把握しようとした、その本質的な様相が、われわれの前にあらわれてきたように思われる。彼は言語を活動性として、現実的な力として叙述した。また言語は、感性的なるものと、精神的なるものを自らの中に統一するものであるとみた。それは固定的であると共に流動的であり、

静止的であると共に活動的であり、媒介的にして同時に独立的である。それは思考を可能にすると共に思考を作りあげる器官である。それは対象を構成する機能を有し、人間存在のすぐれた徴表である。それはそれ自身においてあたらしい創造者として主観と客観を生かしつつ、それらを維持統合しなければならぬものである。したがってまた、それは主観性と客観性が相互に移動し得るような間主観的 (intersubjektiv) な世界を形づくるものである。

最後に、右のような一般的言語の本質の様相から生ずる展望について、かんたんに考察すると、言語が間主観的な性格を持つ独自の世界であることからして、まづ言語と世界の関係が浮び上ってくるのである。すなわち、人間は言語によってはじめて、自己を構成するこの世界とかかわり合いを持つことが可能となるのである。人間と世界との相互関係をまず可能にするものは、言語でありただそれだけである。つぎに、このような言語と世界との関係をあきらかにすることによって、言語と育成 (Bildung) の問題が生じるが、これらについては別に稿をあらためて記述することとする。

註

(1) W. v. Humboldt: Gesammelte Schriften. Bd. III, S. 296. Deshalb kann auch H. Steintal, der vor allem in der ersten Periode seines Denkens unter dem Einfluß der Sprachphilosophie Wilhelm von Humboldts steht, in seinem Buch „Grammatik, Logik und Psychologie“, Berlin 1855 bemerken, Humboldt sei „in keiner Grundfrage der Sprachphilosophie zu einer entscheidenden Ansicht und einem klaren Begriff gelangt“ (zitiert nach Paula Matthes, Sprachform, Wort- und Bedeutungskategorie und Begriff. Halle 1926, S. 14).

(2) Humboldt weist Bd. VII 1, S. 166 ausdrücklich darauf hin, daß Sprachforscher sich zwar an den grammatischen und lexikalischen Bau der Sprache, für ihn gewissermaßen ihr fester und äußerer Charakter, halten muß; aber er darf auch den „inneren Charakter“ nicht verkennen, „der wie eine Seele in ihr wohnt“. Dieser innere Charakter ist „etwas Höheres und Ursprünglicheres“, von dem auch der Sprachforscher, „wo das Erkennen nicht mehr ausreicht, doch das Ahnden in sich

tragen muß“.

- (3) W. v. Humboldt: Gesammelte Schriften. Bd. VII 1, S. 44.
 - (4) Derselbe, Bd. VII 1, S. 45f.
 - (5) Bd. VII 1, S. 167.
 - (6) Bd. VII 1, S. 178.
 - (7) Ernst Cassirer: Philosophie der symbolischen Formen. Erster Teil: Die Sprache. Berlin 1923. S. 98.
 - (8) W. v. Humboldt: Gesammelte Schriften, Bd. VII 1, S. 63.
 - (9) ebd.
 - (10) Vgl. z. B. Bd. VI 1, S. 181; Bd. VII 1, S. 63.
 - (11) Bd. V. S. 9.
 - (12) Bd. VII 1, S. 63f.
 - (13) s. Bd. VII 1, S. 53.
 - (14) Bd. VII 1, S. 38.
 - (15) Bd. VII 1, S. 55. Dieser „klassischen“ Darstellung des Zusammenhanges von Denken und Sprachen geht eine Reihe von Vorfassungen voraus. Vgl. z. B. Bd V, S. 377, wo nahezu wörtlich, aber doch gekürzt und in anderer Satzfolge diese Fassung erscheint.
 - (16) Bd. VI 1, S. 26. In dem Zusammenhang, auf den diese Stelle zurückgeht, heißt es Bd V, S. 380 noch stärker: „Im Menschen aber ist das Denken wesentlich an gesellschaftliches Daseyn gebunden“.
 - (17) Bd. VI 1, S. 26. auch Bd. V, S. 380f. Humboldt verweist auf diesen Dualismus in der Sprache immer wieder.
- (付記) 右の拙稿は前回、掲載されたものの続編である。なおこの稿は筆者が一九六七年、フンボルト研究のためケルン大学に留学中、クレメンス・メンツェ教授の示唆によって作製した手記の一部で、今回あらたに加筆訂正したものである。